

住吉歴史資料館だより



住吉のまちかど

～ 空区のお地蔵さん～

空地区会館の南側のちょっと奥まったところに、一体のお地蔵さんが祀られています。毎年、地蔵盆の八月二十四日には、子供たちの名前を書いたたくさんの提灯が飾られ、無事の成長をお祈りしています。このお地蔵さんは、元々、少し北にあがったところの極楽橋という橋を渡ったところに祀られていました。空地区の「そら」は、古い言葉で、『岩波古語辞典』によると「天と地との間の空間、ひろがり」、また、「地面に対して天上の方」を意味するとあります。天とは、言うまでもなく、古い日本では、神々がおられるところ。そうすると、「空」地区は、その名前から、住吉で人が住む一番上の方、それより上は神々のおられるところといえるかもしれません。「山田」が開発されるのは応仁のころ(1467年頃)といわれ、それまでは「空」が、住吉で人の住む一番北だったのでしょう。

今は暗渠になっていますが、つい50年前には、住吉川からのきれいな水の水路である瀬川(うそがわ)が空区の北の端、今の山手幹線「空の内」交差点の少し上、「右モ左モ有馬道」の石碑のあるあたりに流れて、天上と地上の境界の意味があったのかも知れません。極楽橋は、そのあたりに架かっていました。橋を渡ると、そこはもう天上の極楽の入口で、極楽では六体のお地蔵さまが迎えてくれると仏教は教えます。すぐに住吉村の子墓があり、亡くなった子供たちのお墓でした。有馬道を少し登ると大墓(住吉中学校の西・小林墓地)に到着します。大墓、子墓は住吉の人たちの御先祖たちが眠るところでした。お彼岸、お盆にはお墓まいりの村人たちが極楽橋を渡ったことでしょう。

一帯には、雨ノ神社、大日女神社、庚申塚があり、くぬぎ林が広がっていたとあります。空地区から上は神々、仏さま達が居られる住吉村の聖地であったのでしょう。

大日女神社は、明治四十三年(1910年)に住吉神社内に移転し、子墓は大墓に合併され、うそ川はふたをされ、極楽橋はなくなりました。今では庚申塚と、空地区会館のお地蔵さまだけが、かろうじて昔をしのばせます。

資料館だより 第12号目次

住吉のまちかど
空区のお地蔵さん
.....1ページ

資料館のあゆみ
平成27年度
住吉歴史資料館事業推進委員会
.....2～3ページ

日本一の富豪村
住吉村(2)
住吉歴史資料館事業推進委員
前田康三
.....4～7ページ

東求女塚古墳と
菟原処女伝承(5)
姫路大学人文学・人権教育
研究所准教授
住吉歴史資料館専門委員
松下正和
.....8～11ページ

住吉歴史資料館ご案内

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画してみんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。成果の発表。

お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

1. 各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗 など。
2. 各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書 など。
3. 各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車(いわゆる“馬力”)の道具類などの労働具。
4. 古い写真(近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など)、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5. 災害時の記録や写真。(阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など)
6. 戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7. だんじり、住吉祭の写真。(渡御、宮入、宮出し など)

また、長年住吉に住んでおられる方々に気軽にむかし話をさせていただいております。“ああ、あの人なら、住吉のこと”よお知ってはる”、という方をご紹介下さい。

編集後記

松下正和先生の「東求女塚古墳と菟原処女伝承」が今回第5回で完結しました。昨年8月には茶屋区の村上様のお宅へ参上して、同家で大切に保管されている資料を拝見する機会を得ました。その結果が最終回に反映されています。乙女塚3古墳は有名でいろいろな論文などがあります。そのうちの一つが住吉の東求女塚です。東求女塚につき、地元である住吉の人の目線でまとめられたものは今迄になく、今回が初めてで松下先生にお礼申し上げます。貴重な住吉の財産となります。

11号で「日本一の富豪村 住吉村(1)」をご紹介しましたが、住吉村がこれほどの大邸宅街であったことを初めて知ったとの反響を頂いています。今回は昭和に入ってから建築ラッシュについて述べています。

住吉のまちかどシリーズでは、住吉の道を歩くのが楽しみになったとのうれしい声をききます。2月から新しく山崎先生に資料館専門委員として来ていただいています。近世がご専門であり、古文書の訓読を進めるにつれ、いずれ住吉の面白い歴史発掘ができるかも知れません。おたのしみに。(M.U.記)

- 資料館の作業日は毎週木曜日の午前中です。また、別途、日曜日は展示室を開館しています。(世話人会の委員の方がお世話)
- 資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。平成28年の予定は、7月10日、9月11日、11月13日の各日曜日です。

平成27年度 資料館のあゆみ

住吉歴史資料館事業推進委員会

・古文書の整理解説

本住吉神社「横田宮司家文書」など古文書の整理、翻刻、解説事業。

人々などコーナー別展示。

・住吉の旧家に伝わる資料の発見

庄屋吉田家の資料

・**展示室展示**
古代、参勤交代、住吉村絵図、水車資料、住吉を通過した歴史上の

鎌倉時代末期以来住吉に定住した吉田家の資料が発見され購入した。
(平成28年2月)

吉田家は住吉村の庄屋を勤めた家で、江戸時代にはお酒の醸造、廻船業で巨万の富を築き、金閣寺の修理にも献金した。財力を背景にしたコレクションは「聆濤閣（れいとうかく）」といい国宝重要文化財級の美術学術品を所持していた。

写真資料の提供

反高林区中田さん、山田区寺田さん、西区横田さんなどより貴重な写真を頂いた。

横田さんの写真資料は「黒門」と言われた西区の横田家(旧庄屋横田市左衛門家、また住吉村長家)のアルバム写真で、「黒門」といわれた屋敷や住吉の昭和初期の社会、戦争、祭礼などが写っている貴重なもの。

・聞き取り調査

住吉在住の方々に対して戦前、戦中、戦後、また大震災の聞き取り調査を実施している。27年度までに延べ18名の方々に住吉のむかしの様子をお聞きしている。

・「渦森銅鐸」の鑄造復元

渦森台2丁目出土で東京国立博物館所蔵「渦森銅鐸」を復元した。
(平成26年9月) 京都和銅寛制作。

写真①

小学校の授業で触ったり、たいたりして親しんでもらっている。



写真① 復元渦森銅鐸

編集事業

- ① 『阪神淡路大震災資料集Ⅰ 住吉の記憶 住中と水』
(平成27年3月)
- ② 『住吉歴史資料館だより』10号、11号の発行

連携事業

住吉中学校、住吉小学校、渦が森

小学校並びに東灘図書館とのあいだで次の連携事業を行った。

・3学校合同恒例毎年のお茶会、並びに資料館特別展示

資料館座敷で、「兎原茶道会」指導のお茶会を行い、その後、展示「住吉川水害と子供だんじりのはやしことば展」を開催。
(平成27年11月) 写真②③④⑤

・住吉中学校

- ① 渦森銅鐸復元記念講演会
住吉中学校にて全校生徒に対して奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長の難波洋三先生の「渦森銅鐸とその時代」講演会開催。
(平成27年5月28日)
- ② 文化祭展示「渦森銅鐸展」
(平成27年10月)
- ③ 「トライやるウィーク」で中学生5名受け入れ。(平成27年11月)

・住吉小学校、渦が森小学校

「復元渦森銅鐸」の授業貸出し
(平成27年4月)
・**東灘図書館**
図書館玄関ロビーふるさとコーナーでの展示。
「住吉の原風景とだんじり祭」
(平成27年4月)
「景観のうつりかわりー渦森山」
(平成27年11月)



写真② 住吉小学校茶室へのはいり方の練習



写真③ 渦が森小学校茶室での歩き方練習



写真④ 住吉中学校お点前へのすすみ方の練習



写真⑤ お茶会指導の兎原茶道会のみなさん

日本一の富豪村 住吉村(2)

住吉歴史資料館事業推進委員 前田 康三

住吉村が日本一の富豪村になった歴史的な経緯

わたしたちのふるさと、神戸市東灘区住吉が兵庫県武庫郡住吉村と呼ばれていたころ、明治末1900年ころから大正をへて、昭和二十五年(1950年)の神戸市合併まで、住吉は「日本一の富豪村」とよばれていました。

が調査を行い『住吉村振興論』という著作で答申されました。それは、急いで神戸市と合併する必要はない、住吉村は充分に自立できることを忘れずに今後、考えていけばよい、というものでした。

大正から昭和にかけての第二期邸宅街の形成 1925年から1939年ころ

さて、第2回目は第一期に引き続く第二期の邸宅建築の動きについて見ていきます。

尚、繰り返しになりますが、まとめるにあたり以下の論文を参考にさせて頂きました。住宅の規模は下記の②の表記法『超大邸宅』敷地四千坪以上、『大邸宅』同千〜三千坪に依って表記しました。

第一回では、日本一の富豪村として発展していく原動力となった住吉村当局の動き、官営鉄道住吉駅の開設、明治から大正初期にかけての第一期の邸宅街の形成についてみてきました。別荘ではなく家族と暮らす本邸を構え大阪へ通勤したことが大きな特徴でした。そして子弟の教育機関である私立甲南学園の創立、大富豪たちの社交クラブである「観音林倶楽部」の設立もこの第一期でした。

①『旧住吉村の住宅地開発とその特徴』住宅総合研究財団研究論文集 No.31, 2004年版 主査山本ゆかり(京都大学大学院理工学研究科博士後期課程、当時同人間・環境学研究科修士課程)委員萬谷治子(同修士課程 委員加藤拓郎(住友信託銀行株式会社 当時同修士課程)

②『阪神間の住宅地形成に関する基礎的研究(2)』第4章住吉・御影山

手住宅地』住宅総合研究財団研究年No.21 1994

主査坂本勝比古(神戸芸術工科大学教授)委員鈴木成文(神戸芸術工科大学教授)委員日色真帆(神戸芸術工科大学助手)

住吉村での邸宅建設の第一期、即ち、明治末から大正期(1900年ころから1925年ころ)にかけて、日本最大の経済都市であった大阪と東洋最大の港湾都市・神戸の中間に位置する住吉村に、阪神間の富豪がこぞって超大邸宅・大邸宅を建てたことから兵庫県武庫郡住吉村は『日本一の長者村』と呼ばれるようになりました。

吉村がずば抜けて納税していたかわかりませう。

住吉村の豪壮な邸宅群は、一つが数千坪から数万坪という単位で、芦屋市六麓荘町や東京都大田区田園調布を遙かにしのぐスケールでした。

ここでは極めて裕福な暮らしが営まれており、「阪神間モダニズム」として知られる華やかな生活スタイルは、この住吉界隈の地を中心として花開いたのです。

第一期に建設された大邸宅街での富豪の生活が定着、そして観音林倶楽部や甲南学園など社交・教育施設の整備が進んだことから、第二期でも邸宅の建設が続く、住吉村は独特の雰囲気を持つ住宅地となつていきます。昭和十四年(1939年)くらいまで建設が続いていきます。

耕地整理事業、鉄道インフラの充実、学校設置や誘致、それにコープこうべの前身である「灘購買組合」の設立、甲南病院設立、住吉村宮水道の営業開始などが行われ、住宅地としてさらに付加価値が付けられていったのです。

耕地整理 住吉村では大正六年から大正十三

年(1916年から1924年)にかけて、耕地整理事業を行いました。対象は阪神国道以南でした。一方、官営鉄道以北にある地域は昔のあぜ道をそのままに市街地化しました。耕地整理が完了した大正十三年には、ただちに住宅地に転用されました。

鉄道の充実 阪神国道の開通

この時期、交通インフラが充実してきます。まず鉄道では、大正二年(1913年)官営鉄道・大阪神戸間に芦屋駅が誕生します。住吉駅に遅れること約四十年、これを契機に芦屋、当時の兵庫県武庫郡精道村が高級住宅地として発展を始めます。



写真② 岩井勝次郎邸

私鉄を見ると、阪神電車は明治三十八年(1905年)に大阪出入橋―神戸脇浜間(のち、元町駅まで乗り入れ)が開通し、住吉駅、御影駅が開業します。

大正九年には阪神急行電鉄・神戸線が神戸上筒井(のち、神戸三宮駅乗り入れ)まで開業して、御影、岡本、芦屋駅が同時に誕生しました。阪急御影駅は住吉の山手地区の発展に大いに貢献しました。

尚、阪神電車の開通にともない、その電力を使って住吉村に初めて電気が灯つたのは明治四十一年(1908年)でした。

大正十五年(1926年)には阪神国道が開通します。当初は、こんな広い道作って何を考えているのかと笑われました。当時、一般家庭のお母さんたちは、子供に向かって、「田んぼで遊ばんと、国道で遊びつ。」といったものでした。国道は交通量が少なく広く安全で、田んぼで遊んでいて水路に落ちてしまう方が、よほど危険な時代でした。



写真⑩ 野村徳七邸(長者たちが住んだ町)

それはさておき、阪神国道は大富豪たちの大阪通勤に寄与します。普及を始めた自動車、それは高級な輸入車でしたが、彼らは屋敷から乗り込み大阪まで通いました。住吉駅東側の駅下を南北に抜けるトンネルの道路は大富豪たちの自動車通勤の便宜のため、住吉村が建設し、阪神国道に接続したもので、昭和二年(1927年、大正十五年の翌年)完成しました。

第二期の新しい住民のひとりたち

当時の基幹産業は繊維、紡績であり、日本の貿易輸出額の六割を占めていました。住吉には、日本紡績系・東洋紡績系・鐘淵

紡績系のオーナー社長及び各重役の私邸が集まって来ました。

貿易関係では安宅産業の安宅弥吉氏、伊藤忠商事の伊藤忠兵衛氏、丸紅商店の伊藤長兵衛氏などが住吉村に、岩井産業の岩井勝次郎氏が、隣接する武庫郡御影町郡家に邸宅を構えます。(写真⑩)

具体的に見ていきましょう。

大正中期に鐘紡社長・武藤山治氏が住吉村小坂山に和風の『大邸宅』私邸を構えます。(写真⑪)

大正十二年(1923年)には野村財閥(野村銀行、野村証券)の創業者・野村徳七氏が住吉村小林に『超大邸宅』私邸を構えます。大規模な洋風住宅で三階建て赤煉瓦造り風に仕上げ、建築面積は百九十二坪延四百九十五坪に及ぶ大建築で塔屋をもち、一際目立つ建築でした。竹中工務店の設計。(写真⑫)



写真⑭ 和田邸

長・野村元五郎氏が住吉村観音林にモダンな洋館『超大邸宅』を構えます。(写真⑭)
同年、大阪の大地主・和田久左衛門氏が住吉村小坂山に洋風の私邸『超大邸宅』を構えます。(写真⑮)同年、阪急御影駅の山手、六甲山鞍部の緑深い南斜面の宏大な土地に大林組社長・大林義雄氏がスパンシユスタイルの白亜の洋館と併設して和館を建設し、『超大邸宅』私邸を構えました。(写真⑯)

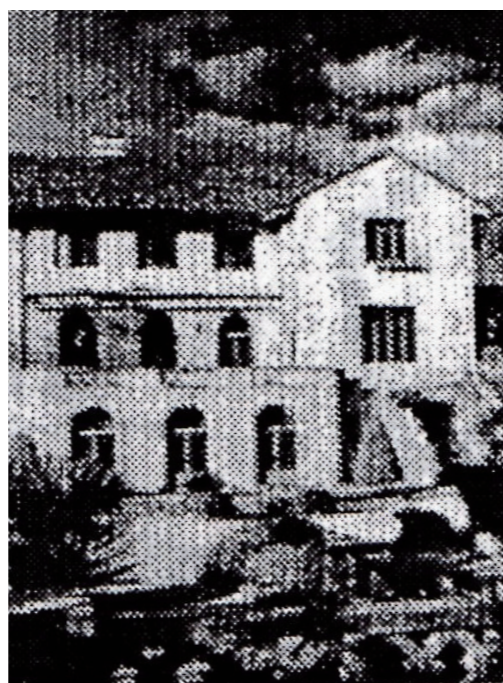


写真⑰ 阪急御影白嘉納本邸 深田池より見る今の「御影ガーデンシティ」のところ



写真⑱ 大林邸の塔

昭和四年(1929年)には、白鶴酒造社長七代目嘉納治兵衛氏が御影町郡家石野に和風の壮大な『超大邸宅』本邸を建築しました。(写真⑱)
治兵衛氏は、中国青銅器を収集し、昭和九年(1934年)には、赤塚山の麓に財団法人白鶴美術館を開設し、それらを展示しました。その南側には数寄屋風の別邸を構えました。



写真⑲ 広海邸(長者たちが住んだ町)御影アーバンライフの場所

昭和十一年(1936年)には、乾汽船社長・乾新兵衛氏が住吉村井手口にネオルネッサンス調の洋館『超大邸宅』を構えます。ここは、神戸市指定登録文化財として現存します。(写真⑳)



写真⑳ 乾邸

次の第3回では、これらの富豪たちと住民との交流につきご紹介いたします。また、阪神大水害、太平洋戦争などでのようになったかについてもお話します。



写真⑳ 住友邸観音林 阪急の住吉川鉄橋のあたりから撮影



写真㉑ 旧住友邸北塀

大正十四年(1925年)には、住友家十五代当主住友吉左衛門友純氏(号春翠)が天王寺から住吉に『超大邸宅』本邸を移します。本邸をどこに移すかにつき、住友家では全国を調べ、武庫郡住吉村に決定されたということ、高級住宅地としての住吉の名声を決定的にしました。尚、天王寺の住友本邸は大阪市に寄贈され、現在、大阪市立美術館、庭園の慶沢



写真㉒ 小寺邸(阪神間モダンズム)

園となっています。住友家は男爵の爵位を持つ華族でもあり、住吉本邸は書院造で御殿としての格式を有しています。吉左衛門氏は京都の公家徳大寺伯爵家の出身で、兄に西園寺公望公爵がおられます。十五代吉左衛門氏は有能な実業家であり、また一流の文化人で青銅器の収集でも名を馳せました。
住友本家の神戸の二邸、「和」の住吉本邸、「洋」の須磨別邸は住友家の財力と美への追求心を著したものでした。現在、住吉本邸はマンションとなり、敷地の北側に塀のみがひっそりと残っています。これは本御影石を使ったモダンなものです。京都の築地塀の様式を取り入れており伝統と近代を巧みに調和させたもので、文化人でも



写真㉓ 武田邸『東灘区25年』より



写真㉔ 野村元五郎邸・大和銀行研修所時代

あつた住友男爵家の往時をしのばせませ。(写真㉓)
住吉には、住友御本家のほか御分家の忠輝邸、義輝邸、を初めとして、本社支配人・国府精一郎、本社理事・三村起一郎、住友銀行会長・八代則彦邸、本社理事で詩人・川田順邸、住友生命理事・橋本重幸邸、住友銀行理事・大島堅造邸などがありました。
昭和四年(1929年)には、関西学院大学教授・小寺敬一氏が住吉村手崎にチューダースタイルの洋館『大邸宅』を構えます。(写真㉔)
同年、野村銀行(現りそな銀行)社

■昭和になって新たに「発見」された出土鏡破片

『住吉歴史資料館だより』第9号では、東求女塚古墳より出土した遺物のうち、『住吉村誌』にも掲載されている6枚の鏡について紹介いたしました。このうち3枚の鏡(鏡番号①③⑥)は、現在東京国立博物館に所蔵されていること、また残りの3枚(鏡番号④⑤⑥)はかつて住吉町役場に保管されていたものの現在は行方不明となっていることも述べました。

今回紹介する鏡の破片⑦⑩は、昭和五十七年(一九八二)に遊喜幼稚園の園舎改築に伴う発掘調査が神戸市教育委員会によって行われた際に、地元で保管されていることが明らかとなったものです。つまり、昭和二十二年(一九四七)発行の『住吉村誌』には記載されていない鏡です。なおこれらの鏡は、村上吉胤氏の著作『灘の四季』(わた吉一九八四年)によると明治三三年(一九〇〇)に福原潜次郎氏が発掘したとあるもので、昭和になって改めて「発見」された鏡といえます。明治三三年発掘という根拠を調べてみたいと思っていたところ、住吉歴史資料館事業推進委員の皆さんのご尽力により、村上

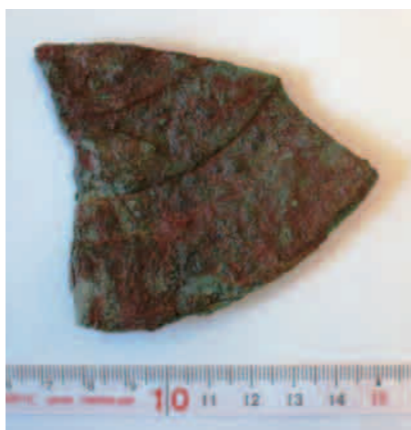
吉胤氏のご子息吉隆さんが鏡の破片を現在も大切に保管しておられることが判明し、昨年(二〇一五年)八月二〇日に鏡の現物を調査することができました。以下では、その際の調査結果を報告したいと思います。

■村上氏保管の出土鏡破片

東求女塚古墳から出土したという鏡の破片は全てで四つあり、今は専用の保存箱の中に大切に保管されています。この四つの鏡について、樫本誠二氏による過去の分析結果『兵庫県の出土古鏡』(学生社、二〇〇二年)などを参照しながら紹介したいと思います。

⑦内行花文鏡

鈕座(つまみ)である鈕の周囲(ちりば)から縁までの一部が残存しており、復元直



【図1】鏡⑦



【図2】鏡⑧



【図3】鏡⑨

径は一五・五センチの中型鏡です。内区の内行花文は二弧文が残存しており、復元すると六弧文になると言われています。このような半円弧形の弧文を連ねめぐらした文様(連弧文)を主体とする鏡を内行花文鏡といいます。また鈕をめぐる圏帯と銘帯があります。縁は平縁です。現在は著しいサビに覆われており、鏡面には赤色顔料・布及び紐の付着痕跡があります(【図一】)。

⑧⑨鏡式不明鏡

⑧は、内区外周部から縁までの一部のみが残存する鏡です。現状では著しいサビに覆われています。内区外周には櫛歯文帯(きしはもんたい)がめぐり、一段高くなっている外区は鋸歯文帯(のこぎりまもんたい)、不鮮明ですが櫛歯文帯・鋸歯文帯の三帯で構成されています。復元直径は一四・四センチ、外区の構

成から神獸鏡系の鏡と想定されています。⑨は⑧よりさらに細かく、外区の一部のみが残存する破片です。サビのため外区の模様は判然としませんが、⑧と同様の三帯がめぐっています。よって、⑧と⑨が同一鏡の破片の可能性もありますが、圏帯の幅などが一致しないことから別の鏡縁片とする説もあります。赤色顔料・布の付着が見られます(【図二】(【図三】)。

⑩鏡式不明鏡(鈕頭)

鈕径二・二センチ、鈕高一・三五センチの半球形の鈕と、その廻りの円座の一部のみが残存する破片です。鈕孔は磨かれています。上記二片の鏡と同一の可能性もありますが、明らかではありません。赤色顔料・布の付着が見られます(【図四】)。



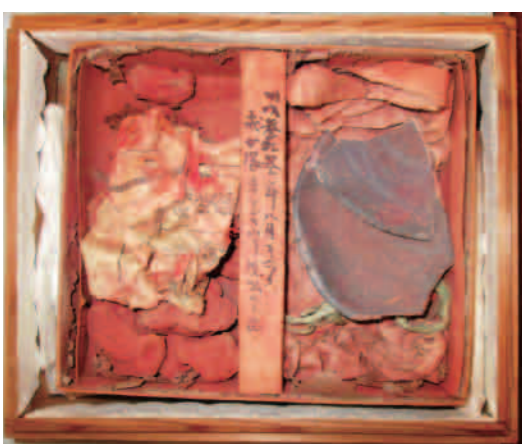
【図4】鏡⑩

■村上福之助氏による調査

先述のように、明治三三年に福原潜次郎氏の指導を受けながら村上福之助氏が東求女塚古墳後円部の発掘調査をおこなったことが、村上吉胤氏の『灘の四季』に記載されています。なお吉隆氏の父が吉胤氏、吉隆氏の祖父が福之助氏にあたるそうです。

この明治三三年に発掘された遺物としては、先にみた鏡の破片の他に、木箱内の紙箱に保管された土師器、朱のついた粘土、図面が納められています(【図五】)。その箱書きに「明治参拾参年八月廿六日ノ求女塚東高キ山ヨリ現出セシ品」とあることからわかります。この「東高キ山」というのは後円部のことです。

紙箱の蓋の裏側には、古墳の絵が描かれ出土状況とともに、福之助氏の署



【図5】明治33年発掘時の遺物



【図6】紙箱蓋の裏書き



【図7】土師器

上げに使われていたことは、『住吉村誌』にも掲載されています。売り渡す直前の八月二十六日に試掘した際に遺物が出土したとあります。いずれにせよ、東側の後円部から出土したものが現在村上家に伝わる鏡片4つ(鏡⑦⑩)やこの紙箱内の遺物ということになります。

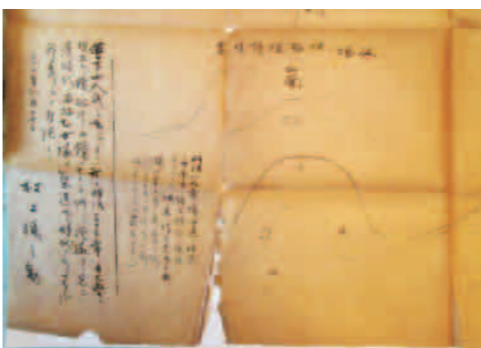
一方、「西ノ山八明治八九年之頃、字中之町人民家屋ノ新築セシ時、壁土採取セシ時、現出セシモノハ、鏡六面、人コツ一ツ、イツ石之〇之形一、長劔一ツ、当役場ニ今二保存セリ」とあり、西側の前方部から出土した物は役場に保存しているとありますので、鏡①③⑥に該当すると思われる。

また、紙箱には土師器の破片が二つ保管されていました(【図七】)。昭和五十七年の発掘調査でも五世紀代の土師器(高坏・壺)が出土していますが、同

遺物を保管していた村上吉胤氏の証言では「小型の銅鏡二面と木片、矢尻が発見されたが、鏡は人夫の不手際で粉碎された」とのことですから、『灘の四季』、四つの破片はともども、⑦の内行花文鏡と、⑧と⑨が同一の神獸鏡系鏡の二枚だったのかもしれない。鏡式の詳細な検討や銅・錫・鉛などの鏡の成分分析、付着物の分析などを待たねば断言はできないでしょう。他の関連資料の調査とともに今後の課題です。いずれにせよ、これらの鏡は、遺体の頭や胸の近くに並べられることで魔よけの意味(辟邪)の役割を果たしました。また、中国王朝の後ろ盾を示す威信財ともなったようです。

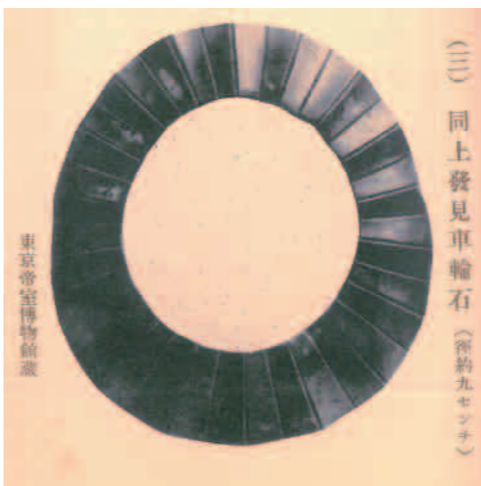
東求女塚古墳からの出土鏡についてさまざまに書籍で紹介されていますが、名称が不統一であるため、一見すると対応させるのが難しくなっています。第11号の12ページに「一覧表【表一】」を付けましたのでご参照ください。

種のものかもしれません。さらには、古墳を南面から見た図、北面から見た図、竪穴式石室の様子、「役場二保存アル埋鏡位置」と記した四つの主題図があり、『灘の四季』の元図にもなっています。鏡に関する部分を一部掲載しましたが(【図8】)、そこには鏡の埋納位置が西側(前方面)に記されています。また「明治八九年之頃中区ノ住民家屋用ノ壁土採取ノ際現出セシト云桐ノ木ノ朽チタルモノ一箇、鏡八六面、人骨一箇、長刀二振ニ◎モヨギ色ノ玉様ノモノ一箇ト桐ノ木クチタルモノノ八箱用ナラン」とあり、『住吉歴史資料館だより』第9号でも紹介したように、近隣住民が家の壁土用に古墳の盛り土を採取したという『住吉村誌』の記述に対応するのでしょうか。出土品については、若干の異同がありますが、「モヨギ色ノ玉様ノモノ」というのはおそらく



【図8】 役場保存の鏡出土位置

く緑色の碧玉製の腕飾りである「車輪石」のことかと思われ(【図9】)。また、この図を記した意図や時期は、「云下山人氏之咄シニヨレハ此ノ明治三十三年八月廿六日二現出セシ鏡ノ破片八二鏡ノモノニテ何レモ模様ヨリ見レハ漢時代ノ品故乙女塚ノ築造セシ時代ノモノナラント参考ノタメ付記セリ」大正十年三月二十日 村上福之助」という記述からもうかがえ、会下山人(福原潜次郎)からの鏡の評価について後に書き記したものであることがわかります。鏡など遺物の出土状況がわからない今となっては、このような図面は考古学的な意義だけではなく、発掘に至る経緯や当時の人々と古墳との関わりを示す資料としてとても貴重なものといえましょう。



【図9】 車輪石
(『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書第二輯』第十七図版)

また、村上家には、京都帝国大学(現 京都大学 文学部)の封筒に収めら



【図10】小林行雄氏撮影の写真

れた写真が一枚ありました(【図10】)。この写真は鏡⑦⑩の四点を写したものです。裏面には「兵庫県武庫郡住吉村ノ求女塚出土ノ明治三十三年八月廿六日発掘ノ発掘者村上福之助」村上家所蔵ノ古鏡破片」写真撮影(昭和廿一年八月)ノ京都帝大考古学教室ノ小林行雄氏」の裏書きがありました。小林行雄氏(一九一〇〜一九八九)は京都大学名誉教授の考古学者です。神戸市に生まれ、神戸高等学校建築科(現・神戸大学工学部)を卒業しました。小林氏は、特に前期古墳から出土する鏡の中に同范鏡(同じ鑄型で鑄造された鏡)が多いことに注目し、畿内の大首長が各地の首長にその地位を認める証として下賜したもの(三角縁神獸鏡)であると考え、畿内を中心とした広範な政治体制が成立したことを解明し

ました(『古墳時代の研究』青木書店、一九六一年)。この学説は邪馬台国畿内説の論拠として用いられました。小林氏もこの東求女塚古墳の遺物に学術的な関心を寄せていたのでしょうか。

■東求女塚古墳の被葬者像

櫃本誠一氏の分析によれば、西摂地域における古墳時代前期の前方後円(方)墳に伴う大型鏡は、池田山古墳(尼崎市)・阿保親王塚(芦屋市)・へボソ塚・東求女塚・西求女塚などに見られます。それらは西求女塚の12面を最多とする複数埋納であり、兵庫県下の他地域ではみられない規模といえます。大和地域など中央の有力古墳の枚数に比べれば少ないですが、それらに準じるものと見ることができるとでしょう(『兵庫県の出土古墳』)。また、ヤマト政権から配布されたと考えられている三角縁神獸鏡を多く含むことから、東求女塚古墳の被葬者はヤマト政権と深い関わりがあったといえるでしょう。

また、森岡秀人氏の見解ではこれらの古墳は、農耕地を基盤としたというよりも、海上交通などの制海に係わった豪族たちの墓と解釈できるとされています。その後、東灘区界隈の「海辺の古墳」群は築かれなくなり、首長のつながりは途絶えます(『神戸ノ尼崎海浜の歴史』神戸新聞総合出版センター、二〇一二年)。海洋氏族の人々は自らの出自を

「えらいこつちや、鏡やないか」という声。崩れた天井石の下から出てきたのはなんと三角縁神獸鏡の破片でした。青緑色の鏡片とあの時の興奮は今でも忘れることができません。ところで、西求女塚古墳は文禄五年(一五九六)閏七月二三日発生の慶長伏見地震によって、墳丘が二メートルほど下に

ずり落ちた古墳であることが後に判明しました。つまりこの古墳自体は文化財であると同時に震災遺構でもあったのです。崩れた竪穴式石室の石材の間から鏡が発見されたのもそのためでした。平成六年(一九九四)二月に現地説明会のお手伝いを最後に西求女塚古墳との関わりはなくなり、またが、その翌月に灘区高尾通にあった大

学寮で私は阪神・淡路大震災に遭遇することになりました。過去の大地震の痕跡を目の当たりにしながら、その時はただ「神戸にも昔地震があったんや」と感じただけで、私自身は古墳が語る慶長伏見地震の「証言」にも特に耳を傾けることもなく、外部に積極的に発信することもありませんでした。過去の災害を含め、歴史というものを研究者の個人的な興味関心だけで解き明かすことに満足していいのだろうか…災害史研究や被災した文化財のレスキュー活動、災害記念碑を地域防災に活かす取り組みを始めたのは、この発掘アルバイ

語るモニメントとしてこれらの海辺の古墳を位置づけていたのでしょうか。

古代の豪族だけではなく、古墳の廻りに住んでいた人々や、宮廷歌人たちなど、それぞれの立場から海辺の古墳についての認識を持っていたようです。古代における菟原郡の古墳がどのように認識されていたのか、なぜ菟原処女と結びつけられるに至ったのかについては、別稿(松下正和「葦屋ウナヒ乙女伝説をめぐるモニメント空間について(一)」(近大姫路大学人文学・人権教育研究所編『翰苑』第3号、二〇一五年三月)にも記したので、あわせてご覧いただければ幸いです。

■昭和の東求女塚

東求女塚古墳は全長が約八〇メートルと復元され、現存する神戸市内の古墳の中では第四位の大きさです。都市化の進んだ東灘区では削平された古墳も数多くありました。そのような中で地元の方々の努力の結果残されてきた東求女塚の存在は貴重な例だといえましょう。明治の頃には墳丘の盛り土が、家の土壁や阪神電車の路線工事用の土として削られることもありましたが、大正年間には保存運動の甲斐もあって採土は中止となりました。その間に二回ほど村民により発掘がおこなわれ遺物も現在まで伝わっているものもあります。大正七年の遊喜園

(現・遊喜幼稚園)開設に伴い古墳の一部が園舎敷地ともなっても、後円部は昭和三〇年代頃まで残っていたようですが、削平され求女塚東公園となりました。昭和五七年の園舎改築工事に伴う発掘調査で東求女塚古墳の規模や施設、残存状況、遺物などが明らかとなっています。

なおこの調査では、古墳の墳丘を掘り込んで、戦時中の防空壕が作られていたことがわかりました。長さ七メートル、幅二メートルの木の部屋で船の廃材や電柱を利用して作られていたそうです。またその中には、瓦や陶器片とともに焼夷弾も捨てられています。

■おわりに

神戸大学の先輩である安田滋さん(神戸市教育委員会)からのお誘いで、私は学部生の頃、西求女塚古墳の発掘アルバイトをしていました。最初の頃は土のう積みやバカボー持ちばかりでしたが、次第にトレンチ内での測図や墳丘主体部の発掘もさせてもらえるようになりました。そんなある日、バチで掘り進めるうちに何か青い物を発見しました。「先輩！何か出てきましたよ」と呑気に報告しにいくと、

トが原体験となっています。住吉歴史資料館の専門委員として、東西の違いはありますが求女塚についての文章をもっとする機会を頂戴できたのも、何かの不思議なご縁だと感じ、感謝しております。

古墳を扱う場合にはどちらかといえば考古学的な説明が多くなるのですが、これまで五回にわたって、私は敢えて、東求女塚古墳を取り巻く古代から現代にいたるまでの、「地域の人々と古墳との関係史」という視点から紹介してまいりました。その中には、古墳の調査や保存を示す事例のみならず、破壊につながるような事例もないわけではありませんでした。しかし、住吉に住まう方々と古墳との関係を示すこれらの出来事全ての積み重ねが、今の東求女塚古墳のあり方につながっていますし、また住吉の歴史そのものでもあります。「永き代に標にせむと遠き代に語り継がむ」と万葉集で歌われた思いを胸に、古墳に関する伝承や考古学的な知見だけではなく、古墳に関わってきた人々の様々な営みも掘り起こしつつ、住吉の皆さんとともに次世代へとつなげていきたいと考えています。最後となりましたが、貴重な資料の閲覧をご許可いただいた村上吉隆様をはじめ、これまで調査にご協力やご教示を賜った皆様にお礼申し上げます。長らくのご愛読ありがとうございました(了)